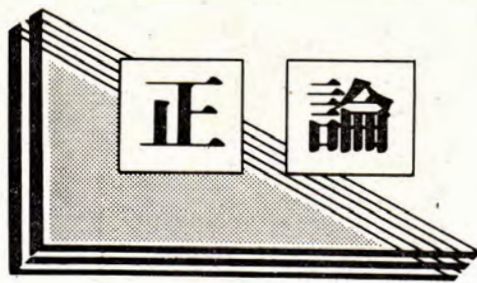


当分は深刻な政治危機

今回の胡耀邦・中国共産党総書記解任は、まさに衝撃的であり、ドラマチックでさえあった。学生や知識人を中心とする民主化運動が思わぬ高まりを見せはじめたことに体制的な危機を感じた最高実力者の鄧小平主任らが党の最高責任者を処断することによって難局を切り抜けようとしたものであるが、いわゆる開放体制下の中国に内在する根本矛盾は何ら解決されていないので、中国は「当分、深刻な政治危機におびやかされるはならないだろう。ポスト



鄧小平の時代への展望を試みれば、なおさら不安がつのをいわざるを得ない。経済改革から政治改革へ、そして開かれた中国へという期待は、この国の内外において、急速に萎んでゆかざるを得ないだろう。

今回の一連のプロセスを分析してみると、いわゆる改革派と保守派の対立という構図が背景にあったことは明白であるけれど、この保守派を私は「原則派」と呼んでゐる。それは彼らが、急ぎすぎ行きすぎの改革に危機を抱いて、社会主義の原則によ

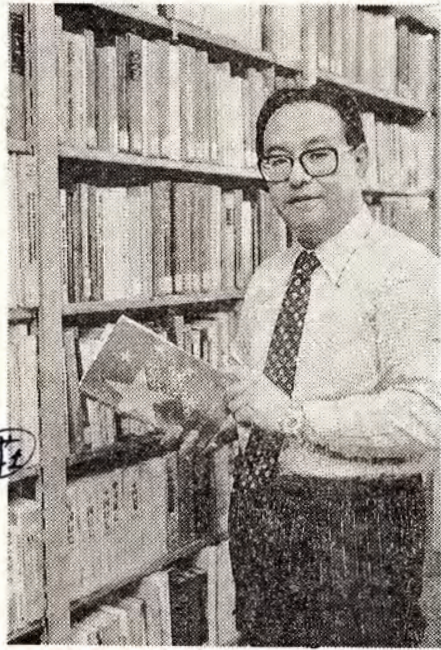
り忠実に「穩歩前進」で改革を進めるべきだと考えているリーダーたちだからである。しかもこれらの原則派は、陳雲グループ、彭真グループ、李先念グループなど、鄧小平の胡耀邦体制下の改革路線に、この

# 「胡耀邦失墜」と日中関係

## 中国内政にコミット避けよ

九月の中国共産党全国代表会議ではきわめて明確になっており、昨年九月の同二期六中全会が採択した「社会主義精神文明決議」は、一般の報道とは違つて、改革の行きすぎにブレーキをかけようとする原則派がいかに根強いかを示したものであった。そのよまな状況のなかで、六中全会では鄧小平氏と胡耀邦氏とのあいだに一種の権力闘争が生じたとの情報もあり、事態は「このあたりから深刻化した」といふのである。そうした内部分裂によつてさらに追

東外大教授 中嶋 嶺雄



いつめられたつあった改革派は、昨年十二月上旬以来の学生デモに一時は勇気づけられたかに見えたが、運動の広がりがかえりて彼らを窮地に追いやり、その責任問題をめぐつて鄧小平の胡耀邦体制そのものに最後の亀裂が生じ、急ぎすぎ行きすぎの改革の責任と民主化運動への対処のあり方をめぐつて、胡耀邦総書記がスケアプオート

になつたものと思われる。

中曽根首相の責任大きい

それにしても、中国がこのような事態にいたつた原因として、日本の影響力や責任

も大きいと私は考えている。過去二、三年、わが国の政・財・官界は、あけて中国の改革に甘い幻想を抱き、バラ色の中国市場を夢みて中国へ殺到し、永年の毛沢東政治や文革の傷を一步一歩癒す余裕をみせず、中国の「西側化」を一挙にはかつてしたのではなかつたか。そのよまな期待のなかで、つい先頃まで、中国は鄧小平の胡耀邦体制下でもうすっかり安定し、日中関係は友好のきずなで固く結ばれていて何も問題はなかつたといふに喟をいたしたのは、日

敵しい対日姿勢覚悟せよ

さうに重要なことは、中曽根首相自身が藤尾厚の陳謝がたがた中日青年交流センター定礎式出席を名目とする去る十一月上旬の訪中で、胡耀邦氏をまえにして、まさに中国の路線闘争にコミットするかのよまな演説をしてゐることである。中曽根首相は、「青年、青年は人類進歩の原動力である。わが国の明治維新は、多数の若者が、わが身を顧みず守旧派と戦ひ、わが国を封建国家から近代国家へと脱皮させた壮絶なドラマであった」と、まるでアッチェターのような口調で語つていたのである。これは明らかに胡耀邦氏ら改革派を鼓舞し、「守旧派」つまり保守派ないしは原則派が打倒されることを願つた演説だと受けとめざるを得ないのであるが、たださ

え、中曽根首相らとの親密な交友のために「今日の汪兆銘」などときまやかされていた胡耀邦氏にこころは迷惑であつたらうし、これを聞いた保守派ないしは原則派の面々はぞろぞろ腹立たしう。

（二）にも隠された中曽根失言があつたのであるが、それだけに原則派の台頭による胡耀邦失墜後の中国は日本にたいしても、かなは敵しい対応するであらうことを覚悟しておかねばなるまい。すでにその方向は、防衛費のGDPに占める割合でもはつきり出ているのである。